

# 粮食能在树上吗？

北基行 記

中国 陕西省 延安近郊

## 木に米がなるか？

穀物の生産を樹木がやってくれれば、耕作の手間がはぶけ、早魃の心配も少なく、省力化と収穫増は間違いないだろう。こんな夢を、画いているのは、農業問題研究者だ。この夢、実現すると思いますか？ 返事は、イエスだ、そんな日がくるかもしれません。

科学技術が進むと、この夢の日が到来するかもしれません。樹木に食料がなるということは、どこでも食料がとれるということだ。高山でも、平原でも場所を択ばない、年中麦が、そこらの草といっしで、どこでも勝手に実を結ぶ。その時には、穀物を植える田地が不要となり、要るのは水だけだ。今はまだ神話のなかのお話のようであるが、その時がくると、それがあたりまえの事となるだろう。こんな日は、案外早く来るかもしれない。

人類が手に入れてきた知識や経験を振り返ると、食料の生産方式は多様化が進み、食料の種類や供給源も増加の一途をたどってきた。この調子で発展がつけば、未来の夢は無限に広がり予想がつかない。

例えば、ソ連の科学者が多年生の新種小麦を研究中に、水耕栽培の新手法も実験した。



延安 蘇園ヤオトン内の食卓

まだ実験中であるから、これを別にして、雲南省の西双版纳に、パンの樹が生えていると聞いたことがある。この植物の果実が、果たしてパンのように食べることができるかどうか、調べていないが、全国各地への移植は、気候の制限で、これもいままでは無理だろう。この話はこれまでとして、現在我が長江を挟む南北の広大な国土に、大樹が繁茂して、食料生産にかかわっているという、この話題にきり替えよう。これはすごい話です。

私の言いたいのは、栗と棗の木である。栗と栗は、我国北方のいたるところに生育し、南方にもあるが、あまり量は取れない。北方では、栗は十年で成長し実がなる。一株で年、二百キロの収穫は固い。果実を研究する友人の話では、栗の栄養価は高く、小麦と大豆の長所合わせ持つ、貴重な存在だそう。棗は、植えて二年で実を結び、五年たてば一株で五十キロも取れるそう。棗は糖分が多く、食用に最適である。

我が祖先が栗と棗を特別扱ったのも無理はない。燕山地区の棗栗は、特に良質で生産量が多い。【戦国策】によると、“蘇秦は將に従を為さんとして、北のかた燕文侯を説いて曰く、燕南は碣石、雁門の饒あり。北に棗栗の利あり。民は田を作らずと雖も、棗栗の実、食うに足れり。これ所謂天府なり。” 史記の『貨殖伝』によると、“燕秦千樹の栗、……此れ其の人皆千戸の侯と等し。” 王充の『論衡』には、“地に葵韭を種へ、山に棗栗の樹へ、名づけて美園となす。” 栗と棗は燕山地区および北方各地で豊富に産し、食料としてきたことを、これら文献が証明している。棗や栗を産する地域は、曾て“天府の国”とか“美園”と呼ばれてきた。



棗 なつめ

そのなかでも栗は、干飯として古人の貴重品であった。陸放翁にこんな詩がある。“齒根浮動して吾衰るたるを嘆ず、山栗炮燔して夜の飢えを療（いや）す。喚起す少年京輦の夢、和寧門外 早朝の時。” この詩から、都で官吏をして居たころ、陸放翁が栗を干飯として食べていた風景を想像することが出来る。チョコレートが外国人の高級非常食であるが、我が古代人は栗が非常食で、その栄養価は決してチョコレートに引けを取るものではなかった。

栗と棗を、昔の人は非常食として重視し、また老人むけの滋養材として扱った。だから、『礼記』には、“子父母に事（つか）へ、婦舅姑に事ふるに、棗栗飴蜜を以て之を甘くせり。” とある。荒地やげ山に、植樹した棗栗が生い茂ると、栄養豊富な食料が獲れるだけでなく、素晴らしい景色が現出するだろう！

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 『木に米がなるか？』ひとそえ

前回は古代からの宇宙への旅についての文章で、一種のSFやファンタジーの要素も感じられました。今回もタイトルだけを見ると、一種のファンタジーのようにも見えます。前半を読むと夢のような話が続きます。しかし、それが却って現実の厳しさを思い起こさせます。大洪水、大干魃、虫害、更には農具類の不足（鉄鋼増産のスローガンの下、なけなしの鋤や鎌を「製鉄材料」として供出させられたと言います）による農業危機、そして大飢饉の時代が背景にあります。



大躍進政策 1958年～1961年

ファンタジーや夢のような話で現実から遊離するより、栗や棗といった身近にある（無謀な農業政策の失敗の影響が少ない）糧食で何とか凌ぐことを勧めるしかない立場からの文章のように感じます。鄧拓の筆にはいささか力と熱量が不足した印象があります（実際に摂取カロリーが少なかったでしょう）。ただ栗や棗を奨励しても、あくまでも副次的で緊急避難的な糧食であり、当然ながら米や麦という主食が大いに不足している中での代替策、弥縫策です。

数十年前に読んだ小島麗逸氏の資料には、日中両国の一人当たりの糧食摂取量は1945年から1960年迄ほぼ同じ水準で推移、それ以降日本は続けて改善して食糧難から脱皮、副食重視・瘦身産業・飽食の時代へと変化、他方中国は反転減少し、主食で満たされるのは1970年代まで待つことになった、と記述していました。

井上邦久

## 粮食能长在树上吗？ 原文

研究农业问题的人，常常希望有那么一天，粮食能够大量地长在树上，使农业耕作大为简便，受水旱的威胁较小，节约大批劳动力而又能够普遍丰收。这种希望有实现的可能吗？回答应该是肯定的。

随着科学技术的进步，我们完全可以相信，会有这样的日子到来。那时候，不但树上能够长出粮食，而且到处都可以长粮食。无论高山、平原，麦子象野草一样，年年自己生长；甚至种庄稼可以不必土地，只要有水就行。许多在现时看来如同神话一般的事情，到那时候都将变成极其平常的普遍现象。这样的日子距离现在大概也不会太过于遥远了吧。

其实，照现在人类已有的知识和经验来说，生产粮食的方法就有不少，粮食的种类和来源也有许多，它们的发展前途将是不可限量的。

例如，苏联的学者不但试验了多年生的小麦新种；也试验了在水面上种植谷物的新办法。这些因为还在试验，且不说它。听说我国云南西双版纳还生长了一种面包树。究竟这种植物的果实是否真的可以当面包吃，我不知道；并且由于气候等等自然条件的限制，这种面包树也还不能在全国各地普遍种植。因此，这里也不说它。现在只说在大江南北的广大土地上，大量地生长着能够出产粮食的大树，这是特别值得珍视的。

我说的是栗子树和枣树。我国北方普遍生长枣、栗，南方也有，不过数量少些。北方的农民都知道，种一棵栗子树，大约十年左右就能长栗子，平常一棵树大约年产栗子二百斤左右。据研究果树的朋友告诉我说，栗子的营养很高，它兼有小麦和大豆的长处，这是很可贵的。至于种植枣树，第二年就能结枣子，五年以后，一棵枣树就能打枣子五十斤左右。枣子不但能顶粮食吃，而且糖分很多。

这就无怪乎我们的祖先非常重视栗子和枣子。特别是燕山地区，枣栗生产又多又好。据《战国策》记载：“苏秦将为从，北说燕文侯曰：燕南有碣石、雁门之饶；北有枣栗之利。民虽不田作，枣栗之实足食矣，此所谓天府也。”《史记》《货殖列传》载：“燕秦千树栗，……此其人皆与千户侯等。”王充《论衡》说“地种葵韭，山树枣栗，名曰美园。”这些都证明，栗子和枣子盛产于燕山地区及北方各地，从来被当做最好的食粮，有枣有栗的地方，曾被称为“天府之国”或“美园”。

尤其是栗子，古人常常把它当成最好的干粮。陆放翁有一首诗写道：“齿根浮动叹吾衰，山栗炮燔疗夜饥；唤起少年京輦梦，和宁门外早朝时。”我们由此可以想象到陆放翁早年当京官的时候用栗子当干粮的情景。外国人往往把巧克力当做高级的干粮，殊不知我国古代人以栗子为干粮，其好处决不下于巧克力。

不但这样，古人还认为栗子和枣子是老年人最好的滋养品。所以，《礼记》载称：“子事父母，妇事舅姑，枣栗飴蜜以甘之。”我们如果能够利用所有的荒野童山，普遍地种植栗子树和枣树，让这些树林长满了富有营养价值的粮食，够多么美妙啊！